

の養成は全く直觀的具體的にてあらねばならぬことは明白なる道理なり。されば幼兒の遊戲、玩具遊、談話等苟くも數ふべき機會あるごとに興味あるべく之を取扱ひ一つ二つと數ふる動作によりて明かに數を識り得る程度より始め、遂には片手の指(五)兩手(十)位は計算を用ひずして認識し得るに至らしめんことを期し、而して其程度は右の表により、四年——五年は五、五年——六年は十以上少しく進みても可なるべし。

(三)數の運用 數の觀念の發達は勿論、其運用の伴ふべき等なれども、幼稚園に於ては、小學校に於て教ふるが如く、其運用を規則正しく教ふるに

## 幼 兒 觀 察 記

從來我幼稚園に於ては一定の題目を設け幼兒の

は及ばずして、單に幼兒自身の必要に應じ彼等の自から啓發するに至るを待つべきなり、モンテッソリーの如く幼稚園に於て十分に算術に力を盡す時は、必ず其成績の見るべきあるべしと雖現今我國の有様に於ては、小學校に於て特別の方法を採用せられざる以上、其範圍内に立ち入るとは却りて心すべき事なりと考ふ。「調査人員僅少にして一般の結論を出すには尙餘りに早きも余の集めたる材料より試に概括推論し我幼稚園に於ける數の取扱上の注意に資したるものなり」(編者曰く此の有益なる研究報告には精細なる四個の表を添えられたるが、印刷の都合上遺憾ながら割愛したり。之れがために此の論文の光彩と科學的價値とを損せること尠からず特に記して望月氏及び讀者諸君に其の多罪を謝す)

廣島女學校附屬幼稚園 野 田 千 代

遊は多く是に基因し居たりしが、近來此の方法を

廢して此時期即ち幼稚園期に於て特に發達せしむべき本能を本として諸種の遊戯をなさしむ即ち最も自由にして束縛なき遊戯の中に幼兒の身體精神共に適當なる進歩發達を促さんとす。

此目的に適せしめんため大遊戯室に接して六個の保育室ありて何れも一方に窓を有し太陽の光線を十分に入るべく各室には小さき椅子、机、低き棚ありて幼兒の遊に用ひらるべき積木、鋏、紙、毬等を納む、二個の小室は蓆を敷きて家庭の遊をなすに最も便利ならしむ。室の一隅には大恩物戸棚等ありて臺所道具は凡て茶戸棚に納めらる、押入には人形、衣類寢具を入れらる。幼兒は自由に此室に入りて各自の思ふがまゝに單獨に、或は組を成して遊び續くるなり。

彼等の遊は各其好嗜によりて異り庭に出で、プランコ、シーソー、綱飛をなすあれば遊戯室の一隅にて土臺に到りて餘念なく遊べるあり(移動本能)母を氣取りて、人形を背負ひ、子守歌唱ひつゝ、縫

物をなすもあれば、側にては襦袢にて洗濯に餘念なきもあり(養護本能)

竹片を持ちて萬軍を指揮せる勇將もあれば、園の畑には三四人の幼兒鋤を持ちて百姓の歌節面白く耕すもあり、「豆ガ出來タラ、竹ヲ立テマセウ」と私語す。

ボートの歌聲聞ゆると思へば、彼方の廊下にては二三人の男兒積木のボートを構成して愉快げに餘念なく歌ひ居たり(構成本能)

保母は常に幼兒の背後に立ち、靜沈なる態度にて各自の遊を注意して觀察し、此時に起りし事項中全兒に與へて有效なりと認むる場合には、同事項を遊戯的に組立て、經驗せしむ。

又教師は日々幼兒を觀察して彼等に必要なりと認むる課題を與ふ、かくして幼兒の表す幾種の遊戯を觀察研究して、其不足を補ひ以て心身共に圓熟せる幼兒を作らんとす。

今茲に自由遊戯の一節を述べんに

## 家庭遊び及び其發達

十月二十一日

一人の女兒は保母に來り、「先生私ハ人形の守ヲシマス」と私語するや、傍にありし二三の女兒も共に家庭遊をなさんと云へり、一人の男兒藤田さん「僕ハオ父サンニナリマスヨ」と云ひつゝ積木にて家を建て多くの椅子を持來りて「僕ハコレデ廊下ヲ作リマスヨ」とて眞面目に働きたり、二三十分餘も餘念なく椅子と椅子とを相對せしめて、廊下を作る代りに椅子と椅子との間を離らしめ、其上に板を置きて前日のより幅廣き廊下を作る、ゆきチャンは廊下を二階と呼びて卓、茶碗、箸等を持來りて來客を饗應せり。

十月二十三日

今日も家庭の遊をなし、が、昨日の三人が増加して五人の兒童が共に遊び居たり、毎日お父さんを氣取れる藤田さんは積木を運ぶに一片宛運搬するに代ふるに、椅子を持來り其上に積木を載せて

運搬せり。

十月二十五日

母となりて遊び居たりしゆきチャンは、草履の穿きありし上を歩みたり、是を觀察し居たりし保母は「ゆきチャン御客サンハ、何處へ下駄ヲ穿キマセウカ」と云ふや、否や直に客の下駄を竝べ置きて室内に入れり。

十月二十八日

家庭の遊をなす時幼兒は常に積木もて、家の輪廓を作り居たりしが、今日田中さんは下駄箱を構成して、家族の下駄を納めたり、傍にありし保母は人形を持來りて人形の著衣を入れる、箆笥を作らんことを促したれば、直に構成し始む。片山さんは是を見て「ワタシ人形ノピアノヲ作リマスヨ」とて異なる幾種の積木を持來りて、人形のピアノを作りたり。

しげチャンは「先生人形サンニ、音樂ノ本ヲ下サイ」とて音樂の書を持來りて人形を座せしめ四

五人の女兒は其邊にありて歌ひ居たり。しげチャン曰く「先生今日ハ音楽會デスヨ」此間ゆきチャンは、臺所にありて、食事の用意を成し居たりしが「皆サン入ラツシヤイ、十二時ダカラ御飯ニシマセウ」と云ひしかど唱歌に熱中せる幼兒はなかなか食卓に著かんとせざりしかば、保母は直に客となりて訪れ「私ハネ、今日御招ヲ受ケテ客ニ參リマシタノ、今丁度十二時デスカラ何卒御一緒ニ頂キマセウ」と云ふや一同食卓に著きたり。

十一月六日

三人の女兒と一人の男兒家庭の遊を成し、母なるゆきチャンは、人形を眠らすに小守歌を唱ひつゝありしが、折しも、組の中にて最も活動に満てる稔さんは、大聲にて歌を唱ひつゝ歸り來り家中を走り廻りしを見たるゆきチャンは「赤チャンヲ眠ラセテルノデスカラ、靜ニナサイヨ」

十一月八日

今日も家庭の遊を成し居たりしが食事の際「オ

母サン私ニ御飯ヲ入レテ頂戴」と五人の兒童は母に迫り居たり、此處に到り保母は客となりて順序に茶碗を渡し、他人の終るまで待つ事の必要な事を示せり。

家庭の遊をなす時草井さんは、家の門に、旗の必要を感じ、是を立てんとしたれども、立つる事能はず、恩物を立て、其間に旗竹を立てしかども、直に倒れたり。次に小石を持來りて、試みたれども效を見ず、遂に諸處を隈なく探せし結果、押入の中にて絲卷を發見し、此孔に竹を立てしに全く堅固に立ちたれば、此時の喜顔面に表れ「先生入ラツシヤイ、コレ旗ガ立チマシタヨ」と實に幼兒は大人より教へられしよりも、自から方法を發見せし時は、其満足幾倍なるかを知らず。

十一月二十三日

今日もゆきチャンと他の三兒とは、家庭の遊をなす、始めにゆきチャンは、第六恩物にて臺所の水道流棚、等作り居たりしが、ふと、盥を持來り

て、人形の著衣を入れて、洗濯をなす、成し終りて是を乾かさんとなし居たれども、柱無きを見て「先生如何シマセウカ、竿ガナイカラ乾ス事ガ出来マセン」と側に立てる村田さんは「ゆきチャン私ガ作ツテ上ゲマセウ」と云ひつゝ、大恩物數個を持來りて柱もて物干を作りたり、是を見てゆきチャンは、大喜にて直に竹片を置いて、著物を干したり。

十一月二十九日

ゆきチャンと、茂チャンとは、家庭の遊を成す時常に母となりて、他の幼兒は、子供として取扱はれ、右兩人は、組の女兒の内、最も勢力家也。今日兩人共休園す、立石さんは、兩人の休を喜び「先生今日私はオ母様ニナリマスヨ」とさも嬉しげに家庭室に入りて、臺所道具、人形等出して大満足の有様見ゆ、歸る際「先生明日モ、オ二人休ミナラ、ウレシイデスヨ」

明日同二人來らば注意して母を擇ばんと氣付く  
十一月三十日

果して二女兒來る、母にならんことを争ひ居たりし故「今日ハ立石サンガ、ホントノオ母様ノ様ニ御手傳ガ出来マシタカラ、立石サンニ、オ母様ニナツテ頂キマセウ」と云ふや、二女兒あまりに争はんともせずして「ソレナラワタシ、オ姉様」「私は親類の叔母様デスヨ」とて親しげに遊び居たり。

十二月八日

今朝は家庭室に入りて遊ぶ子供一人もなし、田中さんは色鉛筆にて熱心に幼兒の繪を畫き居たりしが、其を眺めありし草井さんと茂ちやんは直に紙を持來りて眞似し始む。

藤田さんはクリスマスの木の室内に運ばれしを見るや「先生、アレハ杉ノ木デスネ」と實は樅の木なりしなり、故に保姆は樅と杉との枝を持來りて二者の區別を示したり。

十二月九日

今朝片山さんは、宅より松の木を持參して、家庭室の中央に立てたり、「ソレハ何ニシマスカ」との

保母の尋に對し、「先生人形ノ家ニモクリスマスマスノ木ガ入りマスカラ、コレハネ、クリスマスマスノ木ニシマスノヨ」今日より家庭室の飲事遊は變じて、クリマスの遊となる、家庭室に於ては、机を圍みて、三四人の兒童熱心に切紙提灯等を作りて家庭室内のクリスマス木の裝飾に餘念なかりき。

一月十二日

茂チャンは、家庭の遊を成す際、棚の上の箸を取らんとして床上に落ちし土瓶の蓋に氣付かすして、其上を踏みたり、傍にて其を見し草井さん「アラ茂チャン土瓶ノ蓋ヲ踏デ入ラツシャル」と云ふや、茂チャンは、直に蓋を取上て、棚上に置きたり。

一月十三日

今朝大雪にて、庭一面白砂の雪、迎も、外に出で、遊ぶ事能はず、遊戯室にはストーブの外五個の火鉢を備へて、室内を暖めたり、活動的なる五人の男兒は外に出で、雪を集め、集めてはストーブの上に置きて溶解する様を見て楽しむ。

家庭室の火鉢の邊に座せる女兒は、金盃に雪を入れしものを火に温めて熟視し居たりしが、背後に立てる保母を顧み「先生ワタシ雪ノ圓イノヲ此内ニ入レマシタラ、今雪ガ寢轉ビマシタ」とストーブの傍にて雪を温め居たりし男兒等、雪の熱湯に變化せる有様を見て不思議と思ひしにや、稔さは「先生此湯ヲ外ニ出シタラ、又氷ニナリマス」と尋ねたり。

彼の望むまゝに熱湯を外に置かして翌朝其變化を示さんとす。

保母は沸騰せる湯を戸の硝子上に残し置きしに一時間も立たざる内に、白き氷様の點々は、硝子上に残されたり、幼兒は是を見て大満足に見えたり。

一月二十一日

毎日家庭の遊をなせる女兒は今朝保育室内にあり、机、椅子を遊戯室の一隅に持來りて七人の女兒は幼稚園の遊を成す、茂チャンは教師となりて他

の幼児を周圍に並べて、幼年の友の繪を示しつゝ、話をなし居たりしが、折しも草井さんは是等の幼兒を見付け嬉しげに走りゆき、残れる椅子に座せんとせしに教師となりし茂チャンは是を見て「私ノ椅子ヲ取ツテハイヤヨ、アナタ彼方ニ入ラツシヤイ」とて草井さんを退けんとせり、直に保姆は此を見て泣ける草井さんを伴ひゆき「先生此方ハ私ノ友人デスノ、ソシテ先生ノオ話ヲ大層聞キタガツテ入ラツシヤイマスカラ何卒キカセテ上げテ下サイ」と語るや、茂チャンは急か椅子を持來りて、草井さんに進めたり、幼児の誤れる時かくせよと命ずるよりも、遊の中に自然に其事を成さしむる様、遊戯的に命令の實行を成さしむる方、遙かに有效なり。

### 建築の遊及び其發達

一月十一日

藤田さんは毎日積木にて家を構成する事を喜ぶ藤田さんと他の一男兒は保育室の机を運び其木に

積木もて二階建の家を立て、家と梯子段も出來窓も兩側にありて如何にも可愛らしき家なりき、出來上りし時藤田さんは「先生、ワタシノ家ヲ見ニ來テ下サイ、二階建ガ出來タノデスヨ」出來上りし家は天井低き爲め天井にて頭を打つ、保姆は人形を持來りて「コレ人形ノ頭ガ、天井に、アタリマスヨ」と暗示するや、他の積木をもて是を高ふして、二十分餘も經ずして出來上りし家は人形を入るゝに十分高く出來上りたり、歸る際は此家を翌日迄残す事を願ひたり。

一月十九日

今朝幼稚園の保育室にある彼の家を眺めて「先生、今日僕ハ、臺所ヲ造ルカラ、板間ニスル木ヲ出シテ置イテ下サイ」といふ。

自由の遊の際、彼は長短の板にて棚、水道、臺所等を造りて、其上に臺所道具を置きたり、臺所の建物終るや積木にて門を造らんとせしかど、積木なきを見て「僕、如何セウカ、門ヲ造リタイケレド

モ、木ガナイカラ困ル」と訴ふ、保母は室内にて木の代用になるものなきやと尋ぬれば、室内を限なく探し、遂に砂場より板を運び來り、先に屋根を積木にて、作りありし場處に板を置きて、積木と取換へ、其にて門を建て、大満足の様見ゆ。

家庭室砂場等にて遊び居たりし幼兒等皆集り來りて「アラ、キレイナオ家ネト同音ニ叫ブ」

建築の終りたる時、保母は「皆出來マシタネ、何モ入りマセンデセウカ」と問ふや、藤田さんは二階の梯子段のなき事に氣付く、然れども積木は一個も残り居らず、側に立てる永村さん曰く「ドウセ人形ノ家ダモノ梯子段ハナクトモ、イ、デセウ」といふに「イエ、僕ハ梯子段ガ入ルノダ」とて押入を探して、梯子を持來りて二階の段梯子の代用とし、人形を上げ下げをなさしめて「モウ、出來タ」と大喜悅なりき。

### 盜賊の遊の例

一月二十三日

五人の最も活動的なる男兒は、何物にも興味を持たざるもの、如く、初めに辻臺にて遊び居たりしが、僅か數分間にて砂臺にゆき、此處も二分間程にて遂に庭に出でて『皆デ賊ノ遊ヲシマセウ』といふや稔さんは「僕ガ賊ニナルカラ君等四人ハ巡查サンヨ」とて逃げ廻る後を四人の巡查は追ひ掛けたり。

思ふに是等の男兒は何か活動的な遊を望みて、遂に活力がかく賊の遊に向ひしもの如し「マア賊ヲ追フテルノデスカ」「巡查サンハ賊ナドスル人ガアツテ氣ノ毒デスネ」「巡查サンハ賊ヲ追フ外、如何ンナ事ヲナサイマスカ」と問ふや景ちやんは「アノネ、先生、巡查サンハ火事ノ時ニ、ヨイ手傳ヲシテバスネ」と云ふ「ソソナラ火事ノ遊ヲシマセウカ」といひて五人の男兒を砂場に導き、一男兒は積木にて梯子を作り他の者は家を建てたり。

警鐘を亂打するや消防夫は積木の家を破潰し、帶のホースもて水注ぐ、かくする事三十分餘も續



きたり。

二月二日

今朝も此等五人の男兒は、椅子にて棧橋を造り、  
二臺を軍艦として用ふ、景チャン板間を泳ぎ居たりし故、保姆は「コレハ軍艦デスカ、軍艦ノ外、  
ドンナ船ガアリマスカ」と尋ねれば直に彼は椅子を對向に置きて、船と呼ぶ、他の兒童も同様になす。二本の木を取りて撓と呼ぶ、景チャンは是を置きて外にいでたり、一人の男兒は椅子の船を見て小さい船といふや、永村さん曰く「コレハ船ガ海ノ向ノ方ニアルカラ小サク見ユルノデス」暫くにして景チャンは歸り來り、椅子を相對せしめ置き、其上に臺板を置きて電車と呼び、他の男兒が船にて遊ぶ處にゆきて、邪魔を成し、故「景チャン、是は電車デスカ、電車ハ船ノアル處ニアルノデセウカ」ト問へば、直に電車を彼方に運びたり。

汽車の遊

二月四日

自由の遊の時、五人の男兒は何事をか、相談し居たりしが、元氣なる稔さんは、引出より綱を持ち來り「皆デ、汽車ノ遊ヲシマセウ」と云ふや「僕ハステーションヲ作ル」と立處に答へて、景チャンは積木を車に載せて持來り、机上に積木にてステーションの開札口を作る、建築中彼は窓を作るに當り、上に置く木の短きを見て、板片の長きものを見出し、是を上置き遂に窓を作り、切符を切り判を捺して熱心に遊ぶ、切符賣として窓の後に座すや、多くの兒童は切符を求むべく窓を覗く、此窓より切符を渡さるゝ事を如何にも樂しげに見たり。

稔さんは汽罐車の後に乗る、永村さんは旗持となりて各分業的に遊ぶ、藤田さんは竹を負ひて「名物廣島柿」と呼ぶ。

彼等の盛なる遊を見たる兒童は、各兒の遊を置きて、汽車遊に集り、彼も我もと乗車せんとす、集まりし者は廿五人なりき。

此混雜を見たる、村田さんは「先生僕ハ待合室ヲ作リマセウ、アマリ、澤山ノ人デ停車場ガセマイデスカラ」と云ひつゝ、椅子を周圍に置きて、停車場と呼び、火鉢をも据へたり、五六名の兒童は直に來りて休憩す。

汽車の停車場に著するや、車中の兒童先を爭ふて亂出す、故に教師は切符切に著意すべく暗示したるに、彼は大聲にて制したり。

二月十六日

同五人の男兒、今朝は砂場にゆきて、汽車の遊をなす、村田さんはステーションの門を造り、景チヤンは竹片にてレールを地上に畫きて其上を進行す、二の組の二三の男兒是を見て、直に出で來り神戸新橋と停車場を庭の彼方此方に畫く、切符を作り居たりし稔さん風の強きため紙切の飛び去るを見て「先生、此紙ヲ持ツテ居テ下サイ、風ガ飛バセルカラ」と保姆は「何かデ飛バナイ様出來マセンカ」と聞けば暫くして稔さんは積木の一片

を持來りて紙上に置きたり。

永村さんは竹片に赤緑の紙を張りて旗を作りて記號旗の必要を説く、汽車の來りし時に其二種の旗を用ゐたり。

二月十七日

今朝も同じ兒童汽車の遊をなす、永村さんは夜の出立停止の記號として燈の入用を説き、竹をまげて圓くなし、赤と緑の紙をはりて記號燈を作る、綱の先に毛絲の附著せるを見て、景チヤンは「先生此汽車ハ人ヲシキマシタヨ」と。

店の遊

一月二十三日

汽車の遊に餘念なかりし男兒等は今朝は外にもいせず、室内を彼方此方と歩み居たり、保育室の三四の女兒は紙上に色鉛筆もて模様を畫きて彼等は呉服屋の働人なりといふ、側にありし五人の男兒は直に店を作らんことを話し、恩物にて店臺を造る、二人の男兒は店作りにも忙にて三人は切紙

をもて帽子、前掛等を切り居たり、店臺を終りし

時藤田さんは引出しを作らんとせしかど、何物をも代用すべきものなきを見て「先生引出シガ入ルケレドモ、如何シマセウカ」と、保母は戸棚の引出を用ふべく示せば大喜びにて是を用ひたるに、適當なる店臺出來たれば、其引出に紙、筆、鋏等入れて客待顔に座し居たり。

二、三の組の幼兒は店の遊の興味あるを見て

帶、羽織を求むべく来る。

藤田さんと景ちやんは番頭となりて客を歓迎す藤田さんは反物の丈を計らんとして、尺なきを見て指を尺の代用として計りたり、隣室にて積木にて遊び居たりし女兒は店に入り來り「私等ハネ、此内ノ伯母サンヤ姉様ニナツテ著物ヲ縫ツタリ、御飯ヲ煮タリシマシヨウ」と云ひて、室内の掃除飯事等して遊び愈々盛に進行せり。

## 『菊ちやんの舞踊會』(二)

英文學に現はれたる子供(三十三)

岡田みつ

スミス夫人が、食卓の主人役を勤めるしたり顔や、少々の失策があつても平氣で居る様子は誠に可愛らしかつた。大事のバイを切り分ける拍子にナイフが鈍なまなまので床ふかへバイが跳ね飛んだり、御客が情なさけない程早くパンとバタを頬張つてしまつたり

態々用意したブリキの匙で食べてもらう筈のカスタードが、ズル／＼飲まねばならぬ様に柔かであつたりした。

スミス嬢は、侍女のベッスちやんと御菓子ごかしの奪ひ合をした爲ベッスちやんは御皿ごと御菓子ごかしを四